

飯野徹雄先生のご退官によせて

鈴木 秀 穂 (植物学教室)

飯野徹雄先生は、本年3月を以て停年退官されることになりました。先生は、昭和26年東京大学理学部植物学科を卒業され、続いて大学院に進まれましたが、翌年9月に国立遺伝学研究所に研究員として赴任されました。それから2年余り後、米国ウィスコンシン大学大学院に留学され、昭和33年に ph. D., 帰国後3年程して理学博士の学位を受けられました。その頃国立遺伝学研究所に新設された微生物遺伝部で研究室を主宰され、昭和40年に微生物遺伝部長に昇進されました。昭和46年に東京大学理学部教授として植物学教室に戻られ、遺伝学研究室を担当してこられました。

これまで36年余りの飯野先生の研究生活は、国立遺伝学研究所と東京大学と丁度半々になりますが、その間米国留学前を除いて、一貫して細菌鞭毛の研究に打ち込んでこられました。遺伝学徒として出発されたばかりの先生は、特に遺伝子の変異性に興味を抱かれたようですが、サルモネラ菌の鞭毛相変異の遺伝機構を研究課題として、当時ウィスコンシン大学の J. Lederberg 博士の下への留学が実現したことから細菌鞭毛の研究が始まったようです。鞭毛変異というのは、ひとつの細菌系統の鞭毛に抗原性によってⅠ相とⅡ相として区別される2型があって、それが 10^3 世代に1回くらいの頻度で交互に変換する現象です。1個の細菌細胞はどちらか一方の鞭毛相を現わしていますが、分裂増殖を繰り返すうちに反対の相の鞭毛を生やした細胞が現われてきます。先生はこの現象を遺伝子レベルで解析され、はじめて相変異機構の基本的な図式を提出されました。ひとつの

研究対象が研究者の興味を掻き立てるさまざまな問題を内包していることはよくあることですが、鞭毛は生体構造形成のモデル系としても特異な系を提供し、先生の研究は鞭毛多型や鞭毛形成の遺伝学的解析を基礎に巾広く展開しました。その成果は、生体構造の分子構築や形態形成に基礎的な研究業績となりました。鞭毛を対象とした先駆的な業績によって、先生は昭和39年に日本遺伝学会賞、昭和48年に朝日賞を受賞されました。

先生は、学生も含めて研究に携わる者ひとりひとりの特性を尊重されました。こんなことは当然のことと思われるかもしれませんが、特記する程徹底していたようです。一見、研究室の構成員がそれぞれ全く独立の研究プロジェクトを進めているように見え、外部の人から、飯野先生は一体何をしようと考えていられるのかと聞かれることもありました。

先生は、また、さまざまな用務を引き受けられて忙しい日々を過されました。学内では、各種の主任、委員長等のほか、植物園長、遺伝子実験施設長を歴任されました。遺伝子実験施設の設立とその初代施設長として施設の運営を軌道に乗せることに盡力されました。学外では、文部省学術国際局科学官他多くの委員会の委員や委員長を歴任され、その多忙ぶりは驚異という程に見受けられました。先生は、実に頭の切換えの敏速な方でしたので、たくさんの用務を次々に処理する能力に長けていられたのでしょう。特に、遺伝子操作に関して社会的な問題が提起されたとき、日本学術会議や学術審議会の組換えDNA関係の委員会・

部会などを通じて、組換えDNA実験指針の策定に参画され、我が国の組換えDNA実験を推進する基礎作りに貢献されました。

已年の蛇足をつけ加えさせていただきますと、先生は密かにフクロウの民俗史を研究されています。

退官後は、早稲田大学で教育・研究を続けられると伺っております。お元気で活躍を続けられ、フクロウの研究を完成されることを願ってお送り致します。